



# なきごえ



1997

2



大阪市  
天王寺動物園協会



(撮影：市川 久雄)

- 2 — New Face ラマの赤ちゃん誕生 (市川久雄)
- 3 — 動物と私 エルの思い出 (宮崎滋乙)  
カバウォッチング ハダダトキ (市川久雄)
- 4 — シベリアトラ (ウスリートラ) を追って (福田俊司)
- 6 — フンボルトペンギンの繁殖 (森本委利)
- 8 — グラフZOO (榎原安昭)
- 10 — 動物なんでも相談 (村上勇一)
- 11 — ZOO DIARY

### カバウォッチング

ハダダトキ  
コウノトリ目 トキ科  
*Bostrychia hagedash*

赤道以南のアフリカの灌木のある開けた川沿いやサバンナに生息します。飛び立つ時やねぐらにつく時にハーダーダーと鳴くのでこの名がついたそうです。

(撮影：市川 久雄)

## ||||| 動物と私 |||||

### エルの思い出

**い**ろんな動物の写真や姿を見るたびにフト思い出すのはエルという、僕が小学生時代に飼っていた犬(雑種でメス)のことです。近所でもらってきた全体が白っぽく耳と腰のあたりがうすい茶色がかったとても上品でかわいい犬でした。その犬が大きくなったある夏の日のことです。

**エ**ルが急にワンワン、ウーと吠えるのですがその吠え方がどうもいつもと違いおかしいのです。父が「エルの鎖をはずしてやり」というのではずすと、まっすぐに井戸と壁の間へ飛んで行ってまた激しく吠えていました。どうやら何かいるらしいのです。そして僕らも不審気にみているとエルが急に飛びかかり何かをくわえて、左右にぶちぶちと振っては何度もそれを繰り返しました。蛇です。口には蛇をくわえていたのです。体長1mぐらいの灰色の。ですが蛇はすでにエルに首根っこをくわえられ、ぐったりと白い腹を見せていました。蛇にとってはとんだ災難だったでしょうが僕と家族は大喜び。よくも体を巻かれなかったもんだと冷や汗をかくやら、小柄な犬なのに何と頼りになる奴なんだと頭や体や尻っぽをな

### ← ラマの赤ちゃん誕生 ウシ目 ラクダ科

昨年(1996年)の12月15日にラマの赤ちゃんが誕生しました。母親のクニコは昨年(1995年)の7月15日に神戸市立王子動物園から来た2歳の雌(昨年10月号New Faceに登場)で今回が初めての出産です。



宮崎 滋乙 さん  
(画家)

でてやるやらで、褒美にいつもよりたくさんのごはんと好物の魚の煮たものなどをやりました。それにしても蛇もエルも同じようにキバをむき合い睨みあっていたことでしょうか、しかし一気に首筋に食いつくという、エルの瞬発力、敏捷性には驚かされました。小さな体でおとなしいメス犬のどこにそんな面があったのか、と。

**そ**の後、もう一度同じようなことがあり、へんな吠え方をするので鎖をはずしてやると隅の方へ走って行き、しばらくするとまた蛇を口にくわえて出てきました。何と、一度ならず二度までも“外敵”をやっつけてくれるとは。実は以前、飼っていた小鳥を蛇に食われたことがあったので僕らは蛇には根み百倍、その蛇を愛犬が二度もやっつけてくれたので喜び2×百倍といったところでした。

**さ**て僕の本職は油絵の絵描きなのですが、人間には犬型(単純、率直、楽天的、他人の評価を気にする)と、猫型(他人の評価をあまり気にしない、気まま、非社会的)があると思うのですがどうも絵描き仲間には犬型が多いようです。絵を売らなくてはなりませんから、やはり他人の評価、売れ筋の傾向などは気になります。また友人の優れた絵に出合った時はその技術を教えてもらうこともよくあるので仲間意識、社交性も生まれてきます。猫は未だに苦手で、あの足音を立てずに忍び寄ってくる無気味さ(蛇に似ている)、赤ん坊のような鳴き声、黒目の少ない目など、それに比べれば犬はすぐに尻っぽをふる単純さ、鎖をはずしてやると喜んで走り回るさまは絵描き仲間の陽気なおおらかさに似ているようです。

(みやざき しげいつ)

7年間にわたって、シベリアで野生動物を撮影して、もっとも印象がよくなる、もっとも苦労させられたのは、シベリアトラでした。

日本からほんの僅かな距離しかない隣の国でありながら、世界最大の野生ネコが棲息できるロシア極東の大自然は、いったいどんな所なのだろうか？ わたしのシベリア取材はここから始まりました。

日本の自然と密接に関係しているながら、正確な情報がほとんど得られなかったシベリアの野生動物たちの状況にも、大いなる関心をはらわずにはいられません。日本の冬鳥の故郷はシベリアです。日本の自然を考えれば、どうしてもシベリアに無関心ではいられないはず



シベリアの玄関ウラジオストク

ベレストロイカにともなって実施されたグラスノスチ(情報公開)によって、わたしの長年の希望が実現可能になりました。

ようやく6年目に実現したシベリアトラ(ウスリートラ)との遭遇場面を、わたしの著作から抜粋して、わたしの感激を共有していただき、それからシベリアの野生動物たちの現状をご報告したいと思います。

「1995年5月7日、午後9時、ウスリートラとの出会いは、とつぜんやってきた。」

そのときわたしは、オジロワシの育雛を撮影するために、ラゾ自然保護区キエフカ山林区のコルドンにむかっていた。山道にはいて約40分、車は深くはみからようやく抜けだすと、なぜか急停車した。

げげんそうな表情をうかべるわたしたちに、運転手は言葉みじかにいった。

『チーグル(トラ)。』  
その声は、興奮でいくぶんふるえていた。すぐにその興奮は、わたしたちに感染した。

『なんだって？ どこに？』

『ほらっ！』

『おっ。』

ただちにメドビエーデフは気づき、つづいてオメリヤネンコも…だが、わたしの目はトラをとらえることができない。

『いったい、トラはどこにいるんだ？』

『福田、どこをみている。もっと近くだ。』

『そこだ！』

木立のあいだをぬいつつ、あわただしく視線を落とすと…、意外な場所にウスリートラは立っていた。その距離7~8メートル。そこはあまりに近いので、わたしの視野からはずれていたのだ。

—中略—

わたしが6年間にわたって追いつづけてきた野生のウスリートラが、目のまえに身動きもせず息づいている。動物園に飼われているものから失われてしまった、魅了する野生。むだな肉を削ぎおとした、しなやかな肢体をつつむフサフサとした冬毛。黄と漆黒がおりなす姿態。ピンと張りつめた長い髭…。

—中略—

とつぜん、わたしはトラとおなじ空間を共有したいという衝動にかられた。

トラと反対側の車のドアをそおと開けて、山道におり立つ。わたしとウスリートラをへだてるものはなにもない…。」

「ウスリートラを追って」(偕成社)より。

シベリアの上空をとんで、眼下にどこまでもどこまでもつづくタイガ(密林)を、飛行機の窓から眺めていると、パイコフの「偉大なる王」や、アルセーニエフの「デルスー・ウザラー」の世界のごとく、野生動物の王国がシベリアに現存していると思いがちです。残念ながら、野生動物たちは厳しい状況におかれています。

わたしがシベリアトラに遭遇したとき、森林官はわたしを“シジャストリーピ・チェラベーク(幸運な人)”と驚きました。保護区を10年間毎日22キロ巡回している彼でさえ、シベリアトラに5回しか出会っていないのです。シベリアトラは警戒心が強いこともありますが、絶対数が少ないことは確かです。

5、6年前までは、シベリアトラは60~70年かけて数を回復しつつあったのですが、最近になって急速に数を減らしています。ロシア科学アカデミーのユージン・ピクトル氏は、1993年に300頭以上、1995年に200頭以下、2000年には1ヶタになると警告しています。WWFでは、シベリアトラは中国東北部を含めても150頭になってしまったと報告しています。

広大なシベリアから、どうしてシベリアの生きものの頂点に立つシベリアトラが減少しているのか…この問題を考察することが、すなわちシベリアの野生動物たちの置かれた状況を説明することになると思われます。

1 密猟：もちろん、ロシアでもトラの狩猟は禁止されていますが、高価な毛皮、薬用になる

骨をねらって密猟は絶えません。日本には年間100枚以上の毛皮が違法に渡ったと言われていいます。わたしにも、トラの毛皮



シベリアトラの毛皮

を日本の中古車1台で交換したいと話かけられたことが数回ありました。

中国にながれる数も無視できませんが、最近では中国側の刑罰が厳しくなって被害は減少しつつあるようです。

猟場の獲物を守るために、密かに猟師がシベリアトラを葬り去ることも聞く話です。

シベリアは、クロテンの毛皮をもとめて開発されており、狩猟天国であることに留意しなければなりません。優れた猟師は1ヶ月前のトラの足跡を追跡できるほどです。これは本当です。

2 餌の減少：1992年をピークにしたロシアの食料不足は、食料品店の棚から食肉の姿を消しました。

この期間にはおびただしい数のシカやイノシシが撃ち殺されました。飢えをしのぐために、食料としたこの行為を、



シベリアトラの足跡

だれが責めることができるのでしょうか？

3 タイガ(密林)消滅の進行：経済の建て直しがかばれて久しいロシアにとって、外貨を稼ぐことのできる国産品はきわめて限られています。樹木は、てっとり早く外貨にできる貴重な資源であることから、今後も森林伐採は加速を増して、シベリアトラの生息地の減少、獲物の減少とともに、ますます重大な問題になっていくに違いありません。

ところでタイガといえば、針葉樹林の鬱蒼とした森林を思い浮かべますが、ロシア語のタイガ本来の意味は密林です。しかし、おそらく

モスクワやヨーロッパ経由で入ってきたこの言葉は、ヨーロッパから鬱蒼とした広葉樹林が姿を消してしまっただけに、北欧の針葉樹林のイメージに近いのではないのでしょうか？

だから「デルスー・ウザラー」にしばしば出てくる、“これぞウスリーのタイガ”という表現に惑わされてしまいます。そこに書かれている樹木は、ドロノキやシュウリザクラであるからです。

シベリアトラが棲息するウスリーのタイガで、もっとも重要な樹はチョウセンゴヨウです。チョウセンゴヨウの巨大な松の実の栄養価が高く、膨大な量が実るので、“タイガのパン”と呼ばれます。この樹が生えている森は、シカ、イノシシ、クロテン、リスが豊富にみられますから、シベリアトラも棲息することができます。

しかし、チョウセンゴヨウはシベリアでもっとも高価な樹木で、需要もたかいです。チョウセンゴヨウの伐採は現在の法律で禁止されていますが、無法に切り倒されるものは後を絶ちません。チョウセンゴヨウの豊かな実りを欠いた林では、世界最大の野生ネコを育むには荷が重すぎます。

ロシアでは、森林を伐採したあと原則的に植林をしますが、天然更新をうながす特別な方法を採用してきたし、永久凍土に生える森林ツンドラの樹木の伐採は冬期だけに限定してきましたが、これらの慣習も無視されています。さらに伐採を上回るかもしれない山火事の被害など、シベリアトラを取り巻く環境はきわめて厳しいです。

これは、アムールヒョウにも言えることで、1972年の調査ではシホテ・アリニ山脈最南部、ハンカ湖西部、シュファンスキ高原の3ヶ所から45頭未満が確認されましたが、1984年の時にはシホテ・アリニとハンカ湖から姿を消して25~30頭、現在は15頭未満と推定されます。

以上、きびしく暗い面を強調しましたが、中国ではすでに20頭未満、朝鮮半島からはほぼ絶滅が予想されるシベリアトラが、シベリアには現在も150頭以上が棲息していることを考慮すれば、シベリアの自然保護は手遅れではなく、まだまだ豊かなワイルドライフにあることに視点を置くべきでしょう。今世紀末まで残された貴重なワイルドライフの世界を次の世代に伝えられるかどうかは、わたしたちの英知にかかっているのではないのでしょうか？

(ふくだとしじ)



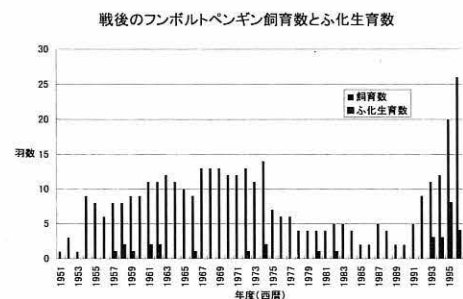
タイガに生えていたアツモリソウ

# フンボルトペンギンの繁殖

**開**園当時、大正4(1915)年、当園にはペンギンの姿はまだみられませんでした。記録によればそれから昭和2(1927)年までの間に、種類は分かりませんが当園に初めてペンギンがお目見えしています。戦前には、それを除けば、ガラパゴスペンギンやフンボルトペンギンも来園していました。戦後は復興のさなか、動物がほとんどいなくなっていた当園に、昭和27(1952)年、フンボルトペンギンが2羽、他数種の動物とともに購入されたのを皮切りに、アデリーペンギンやヒゲペンギンも昭和33(1958)年、寄贈により来園し入園者の目を楽ませてくださいました。その後、ジェンツーペンギン、オウサマペンギン、マカロニペンギン、イワトビペンギン、マゼランペンギン、ケープペンギンと昭和39(1964)年から昭和49(1974)年の11年間に、6種ものペンギンたちが寄贈や動物交換でぞくぞくお目見えしています。これらのペンギンの中で、当園で初めて繁殖したペンギンはフンボルトペンギンでした。それは昭和32(1957)年4月のでき事でした。それから遅れること12年、オウサマペンギンが繁殖。その後、昭和57(1982)年までに、ケープ、イワトビ、ジェンツーのペンギンたちが繁殖しています。

**と**ころで、世界に16種(学者により少し数が異なる)いるペンギンのなかでフンボルトペンギンは、野生での生息数が激減し、「絶滅のおそれのある動物」として、ワシントン条約で最も規制のきびしい附属書Iの中に含まれています。激減の原因は、漁業や沿岸開発、エルニーニョなどの気候変動が大きく影響しているといわれています。このフンボルトペンギンは、世界の動物園や水族館で普通に見られるペンギンですが、日本の動物園でも、比較的飼育しやすいことから昔から飼育されています。というのも、通常ペンギンというと、南極にすんでいるものと考えがちですが、この種は南米のペルー(南緯10度)からチリ(南緯40度)の太平洋沿岸だけに分布し、ここには南極から北へ寒流のフンボルト海流が流れているため水温は低く、かなり低緯度までペンギンがすめます。それでも低緯度では気温はかなり上がるため、フンボルトペンギンは暑さに強く、夏場でも冷房施設がなくとも十分飼えるペンギンだからです。当園もそれに違わず、先ほどのべたように昔から飼育していますが、過去の繁殖成績は、大人まで育つものがあっても1羽か2羽で、

それも数年に一度というものでした。現在当園には、オウサマペンギン8羽、マカロニペンギン1羽、イワトビペンギン7羽、フンボルトペンギン21羽、計4種37羽を飼育しています。下のグラフをみていただくとよくわかるように、このところフンボルトペンギンの繁殖がうなぎ登りに上がっているのがおわかりいただけると思います。これ



は、過去から現在にいたるペンギン飼育担当者の絶えまぬ努力の結果といえるでしょう。

**飼**育ペンギン4種のうち、フンボルトペンギンだけが1年をとおして屋外で飼育しています。イワトビペンギンの巣は、観覧客通路側から見るところにつくられているのでひとめでわかりますが、フンボルトペンギンの巣は、屋外展示場の裏側にコンクリートブロックで作られた小さな小屋の中で作られていますのでなかなか見ることはできません。もともと野生では、土に穴を掘ったり、岩の間や穴に巣作りしますから、それに似たような状態にしようとして小屋を設置しているのです。この巣小屋についてはいままでいくらかの改良を加えてきました。その天井にあたる屋根部分は、雨漏れやすきま風が入ってきたりしないようびったりしたものに改善したりし、同時にいたんだブロック塀も修繕しました。ペンギン担当の村田係員は、



小屋の中の親子

いつも巣材として使っている竹枝の下に、さらにサンゴを敷いて通気性を高め、また巣小屋の入口が観客通路側を向いているところには、観客の視線が見えないように衝立を取り付けたりもしました。

養面では、ペンギンのエサは冷凍小アジを与えていますが、ビタミンが不足しないよう、数年前から総合ビタミン剤を与えています。また当園では、3年前まではフンボルトペンギンと分類学上非常に近い(同じ属にはいる)ケープペンギンも飼育していました。しかし2種を同居飼育していると、両種間でペアができてしまい、肝心のフンボルトペンギン同士の繁殖がうまくいかななくなるためケープペンギンは飼育しないことにしました。それに加え、ほぼ同時期にフンボルトペンギンを神戸市立王子動物園から3羽、海外から4羽導入したことも大きな刺激となり、さらには先に述べた担当者によるさまざまな工夫がうまくマッチし相乗効果を生んだので、この3年間で4回あった繁殖期に大きな成果を上げることができました。

**フ**ンボルトペンギンの繁殖は、生息地では周年みられますが、当園では秋から冬にかけて、ときには春に一つがいのペンギンによりふつう2個産卵され、両親の交互による抱卵によって、ほぼ35日でヒナがかえります。ヒナは小さいうちは両親から、吐きもどしの半消化のエサを、口の中へ直接入れてもらい、これのみこんで育ちます。ヒナが巣から出て泳げるようになるまでには、50日から70日くらいかかります。今季の繁殖数は3つの巣で6羽、一番最初にふ化が確認されたのは昨年12月5日で、最終が12月20日でした。しかしその後2羽のヒナがふ化後17日で死亡してしまい残念でしたが、残る4羽は順調に育っています。本誌が発行されるころにはもしかするとお目見えしているかもしれません。その頃は生まれたての時にみられるふわふわした黒っぽい綿羽も頭のうしろにわずかに見られる程度となっており、体格も親とほとんど変わらないほどになっていることでしょう。ほぼ2年すれば親と同じ色になり、親に見られるような、顔や体の白と黒の帯がはっきりしてきます。

**ヒ**ナは、ふ化のときから注意してみておかないと、その生命にかかわることが時におきます。今回のふ化でもありましたが、卵の殻を自力では小さな穴しか開けられず、結局、自分ではふ化できないヒナがいました。こんなときは、タイミングよく我々が殻を割ってやらないとそのまま死んでしまうのでふ化時は十分見守ってやらないといけません。

**ま**た昨年6月のことですが、原因不明でやせてきているヒナが2羽見つかりました。フンボルトペンギンは、直接飼育係員の手で与えるオウサマペンギンとはちがいで、池に投げ込まれている

魚を自力で採食する自由採食となっています。



只今給餌中

ですから群れ飼育でよくある「食い負け」と考え、入院させ十分採食させることにしました。しかし、3日後その1羽が亡くなり、解剖の結果、胃の中に落ち葉の葉柄部分のみがたくさん胃の中に詰まっていたのでしょうか？胃にこんなものがたくさん詰まっているような状態では、エサは十分食べられず、やせるのは当たり前でしょう。幸運にも、入院している残り1羽については、原因が先のものとはことなり、入院後は、投薬と担当者による定期的な体重測定をしながらの慎重な給餌により、順調に回復し退院させることができました。



体重測定

昨年11月、野生に生息するフンボルトペンギンの状況を憂慮して、初のフンボルトペンギン保護国際会議が我が国で開催されました。その報告によれば、生息地チリーとペルーの生息総数は多く見積もっても2万羽ほどで、今世紀初頭数十万羽とみられていたことからすると、この百年のあいだに数十分の一に激減したということです。

**日**本動物園水族館協会の昨年の調査によれば、日本には約2,300羽のペンギンが飼育されていますが、そのうち約半数を占める1,200羽がフンボルトペンギンで、これは、欧米の園館ではあわせても約1,700羽ほどしか飼われていないということからすると、いかに日本の飼育数が多いかがわかります。まさに今、日本の動物園、水族館が、これまでの飼育経験とその技術を結集駆使して、絶滅に瀕するフンボルトペンギンを救うときがやってきたといえるでしょう。当園もその一翼を担えるよう頑張りたいと考えます。

(飼育課：森本委利)

# 日本のツル

ツルは動物園の鳥の仲間では代表的な鳥ですが、世界には15種類おり、そのうち日本で記録されたのは7種類です。そして、そのすべてを天王寺動物園で飼育しています。今回は天王寺動物園の日本のツルを紹介しましょう。

(撮影：なきごえ編集部、構成：榊原安昭)



## カナダツル

北アメリカのツンドラ地帯で繁殖し、北アメリカ南部で越冬するツルですが、まれに鹿児島県の出水市のツルの渡来地などに他のツルに混じって渡って来ることがあります。

なきごえ33(2).1997



## クロツル

世界的にはヨーロッパからアジアまでの広い地域で繁殖し、アフリカ、インド、中国南部などで越冬します。日本ではツルの渡来地で有名な鹿児島県の出水市に毎年少数が越冬するほか、北海道から沖縄までまれに渡来する珍しいツルです。



## マナヅル

鹿児島県の出水市で毎年1000羽以上が越冬するツルです。アムール川の中流域で繁殖し、冬は鹿児島以外では朝鮮半島南部や中国の揚子江下流域に渡ります。

なきごえ33(2).1997



## タンチョウ

日本の絵画などによく描かれているので、最も日本人に親しまれているツルです。日本では北海道の東部に一年中生息する留鳥ですが、大陸ではモンゴル東部、中国東北部、ウスリーなどで繁殖し、中国東部の南、朝鮮半島などで越冬する渡鳥です。

## ナベヅル

世界のナベヅルのほとんどが、鹿児島県の出水市で越冬するほか、毎年少数が山口県や高知県にも渡ってきます。繁殖地はバイカル湖以東のタイガや中国の揚子江の下流域などです。



## グラフZOO



## ソデグロツル

シベリアの北極海に面したコリマ川河口からレナ川河口やイルチシ川とオビ川の合流地付近の湿原で繁殖し、インド、中国の揚子江の下流域などで越冬します。日本にはまれに冬に渡来します。



## アネハヅル

ユーラシア大陸の温帯域で繁殖し、北東アフリカ、中東、インド、中国などで越冬します。日本へは冬季まれに渡来する迷鳥です。

# 動物 なんでも相談

ツルは千年、カメは万年生きると聞きました  
が、ほんとうですか。

大阪市 S. Y (小5)

寿命が非常にながいことをたとえて“鶴は千年、亀は万年”と言ひ、縁起がよいときによく使われますね。実際にはどうなのでしょう。資料を調べてみますと(日本動物園水族館協会1980年刊)、ツルの仲間ではソデグロヅルが61年間、またカメの仲間ではアルダブラゾウガメ(リクガメの仲間)が152年間、カロライナハコガメ(ヌマガメ科でクサガメがこれに属します)が138年間飼育された記録がありました。この数字は飼育期間ですから寿命はこれに何年かがプラスされるわけですが、ツル、カメいずれにしても千年あるいは万年を生きたことはまず無理でしょう。では天王寺動物園ではどうでしょうか。クロヅルの飼育期間は25年、アルダブラゾウガメは19年間ですからまだまだ長生きしてくれるものと思います。ちなみに当園で飼育期間の1番長いものはアジアゾウの約46年で年齢は47歳と推定しています。どちらにしても動物達が“鶴は千年、亀は万年”というほどに長生きしてほしいものです。

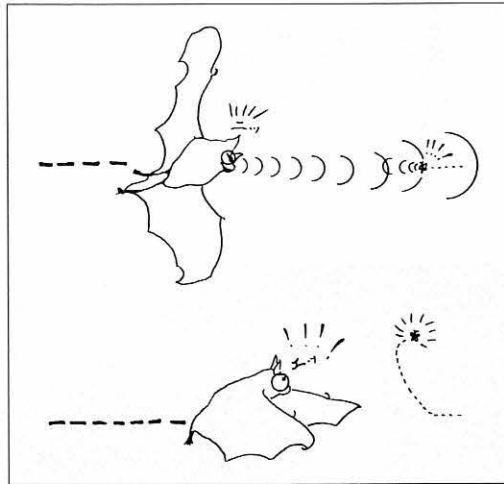
コウモリはどうして暗闇の中を飛び、餌を取ることが出来るのですか。

名張市 T. M (小3)

確かに暗闇では灯りという手段がなければ人間は物の判別さえ出来ない不自由な世界なのに、コウモリは自由に空を飛んだり昆虫を捕まえたり出来るなんてほんとに不思議ですね。いったいコウモリはどんな魔法を使っているのでしょうか。

実はコウモリは音波レーダーを駆使しているのだから暗闇の世界でも活動することができるのです。

スピードガン(レーダーの1種)がピッチャーの投げた球の速度をはかるように、コウモリが持っているレーダー機能で例えば餌である昆虫の動きをはかっているのです。人間がいろんな光を自分の目で感知して(視覚で)外の世界を知ると同じように、コウモリは自分が発する超音波が対象物に反射してかえってくるこだま音波や餌などが発する音波を耳で感知して(聴覚で)自分のおかれた位置や微小な昆虫などの対象物の大きさ、移動速度、性質などを手に取るように知ることが出来るのです。これをエコロケーション(反響定位)またはこだま定位といいます。ところが餌にされてはたまらない昆虫の中にはコウモリが発する超音波を感じると急旋回したりして逃げようとするものもいるそうです。なんだかハイテクなレーダー戦をくりひろげているようですね。



もっともすべてのコウモリがこの能力をもっているわけではありません。コウモリ類は小形の動物食コウモリ(小翼手亜目)と大型のオオコウモリ類(大翼手亜目)に2大別されます。このうちレーダー機能をもっているのは小形の動物食コウモリなのです。オオコウモリ類はどうしているかといえば優れた視覚と嗅覚で自分や物の位置を判断し、果物、花粉、花蜜を餌としているのです。

さて、このエコロケーション(反響定位)はコウモリだけでなく、一部の鳥類(アナツバメの仲間やアブラヨタカ)、ハクジラ類(マッコウクジラ、イッカク、イルカなど)にもあるそうです。ハクジラ類は、暗く濁った水の中では眼よりも便利なエコロケーション(反響定位)を使って魚などの餌を取るのだそうです。

(飼育課: 村上 勇一)

12月2日 チンパンジーの“ミナミ”の定期健康診断を行いました。同時に凍結保存しておいた“リッキー”の精子を使って人工授精を行いました。



12/4. ベニイロフラミンゴが翼を怪我したので治療を始めました。

12/5. 今季初めてフンボルトペンギンがふ化しました。この卵は、10月29日にペンギン舎の8番目の巣箱で産卵を確認したものです。

12/6. トカラヤギの双仔が生まれました。

12/7. ドバトを1羽保護しました。

12月8日 平成8年春に生まれたコアラの赤ちゃんの命名式を行いました。名前は、多数の応募の中から審査の結果「アルン」に決まりました。「アルン」に応募した人の中から抽選で50名の方にコアラのぬいぐるみをプレゼントしました。キジバトのヒナを3羽保護しました。



昨日嘴上げを始めた6番目の巣箱のフンボルトペンギンのヒナが自力でふ化していませんので、卵の殻を少しずつ破って強制的にふ化させました。

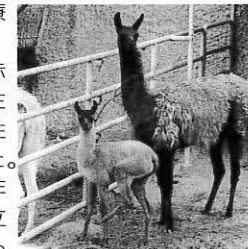
12/9. ヤギの双仔が生まれました。

12/11. 11月30日に保護したキジバトが元気になったので、自然復帰させました。

12/13. ヤギが1頭生まれました。

12/14. 10月13日に生まれたスナドリネコの赤ちゃんの一般公開を始めました。

リュウキュウイノシシのオスが怪我をしたので、治療を始めました。



12月15日 ラマの赤ちゃんが1頭生まれました。性別はメスでした。母親は平成8年7月に神戸市立王子動物園から贈られてきたもので、妊娠期間から考えると、王子動物園で妊娠し、来園したようです。

12/16. ヤギが1頭生まれました。

12月17日 平成8年度の協会理事会が磯村会長出席のもと開催され、



## 今月もおもしろ情報満載

# ZOO DIARY

先の火災事故の顛末について伊東専務からの報告に続いて議案の審議があり、事務局提案の議案はすべて満場一致で可決されました。

12/18. ペンギン舎の3番目の巣箱で、フンボルトペンギンが1羽ふ化しました。

アムールトラが交尾しました。

12/20. 干支にちなんで、エランドやブラックバックなどウシ科の動物を展示しているカモシカ園にしめなわを飾り付けました。

ペンギン舎の3番目の巣箱で、2羽目のフンボルトペンギンがふ化しました。

アカカンガルーが交尾しました。

12/21. 爬虫類生態館“アイファー”でアオハリトカゲが4頭生まれました。

“鳥の楽園”でハワイガンが産卵しました。

12月23日 昭和43年10月から営業してきた協会第一売店が11月9日未明火災のため全焼しました。このため同売店が再建されるまでの間、新世界ゲート正面で仮設店舗として一部の営業を再開しました。



フランソワルトンのメスを福岡県大牟田市動物園に貸出しました。

12/24. 11月14日からメスの出産準備のため別居していたホッキョクグマの同居を再開しました。

12/27. ヤマネコ舎で10月29日に生まれたカラカルの赤ちゃんの報道公開を行いました。一般公開は今年1月5日から行っています。

12/28. チンパンジーの子供“レックス”が指を怪我したので、治療を始めました。

### 訂正

- 1月号P10の右側、上から6行目、「サッチャン」は「サトミ」と訂正します。
- 1月号P10の右側、上から8行目、「1月号」は11月号のまちがいでした。

愛ある暮らし、応援します。

# Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS



## 生態・飼育・図鑑が一つの本の 中にギッシリ

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？ 動物園での世話の仕方は？ 仲間とは？ など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

くらしかいかたシリーズ<既刊本>  
B5変型判・オールカラー

### むしくらしかいかた

野山でみかける身近な昆虫たち  
250種を紹介。

### ちいさないきものくらしかいかた

昆虫以外の小さな生き物を320  
種紹介。

お求めは、お近くの書店で。 ひかりのくに株式会社 本社/〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

# 新・きれい色 FUJICOLOR SUPER G ACE 400



## カメラの大林

桜橋本店 ☎341-8091  
阪急三番街店 ☎372-5031



平岩米吉著

ニホンオオカミの生態と歴史の集大成

# 狼 — その生態と歴史 —

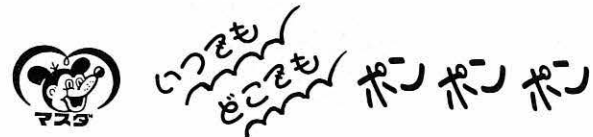
平岩米吉[著] A5判 308頁 定価2,678円(税込)

ニホンオオカミは今もどこかで生きのびているのか——。狼と生活をともにした実体験を基盤に、数十年にわたり収集した正確な資料と生態学の眼をもって、ニホンオオカミの特徴や大きさ、性質などを分析。今も根強く残っている残存説を検証するとともに、絶滅へといたる歴史をも詳述する「ニホンオオカミの正史」。

築地書館 〒104 東京都中央区築地2-10-12 TEL 03-3542-3731 FAX 03-3541-5799 振替 00110-5-19057  
●ご注文は、最寄りの書店または直接上記宛先まで。(直接郵送時の送料は一律400円です。)



# マスターのポップコーン



〈営業品目〉 製造機械・保温機 他  
生コーン・袋詰ポップコーン・原材料一式

(株)増田食品 〒561 大阪府豊中市穂積1-10-30  
TEL (06) 865-0165

新作  
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」  
19分(10本常備)

- 対象/保育園・幼稚園・小学校の先生
- 貸出期間/10日間
- 貸出料/無料(但し郵送料510円は必要)
- 申込先/当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)  
好評発売中 ¥800(50度用)

## 天王寺動物園の本 入園の記念・手引に……



オールカラー  
**500円** 園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会 〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06) 771-0201

あぁ、男のやすらぎ。ジョージア。

ひと息入れよ。ジョージアで、

Enjoy **GEORGIA**



**鳥獣輸入**

全国動物園水族館御用達

- ・医学実験用動物
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの) 要郵便券250円

**有限会社 吉川商会**

本社 神戸市中央区中山手通3丁目11番4号 電話(078)221-8195(代)

飼育場 兵庫県小野市来住町1513番地



たのしい動物のお話は、ガイドマシン(動物説明機)で、どうぞ!!



園内、主要動物舎30数カ所にあります

関西特機株式会社  
電話 06-762-2333  
1回 30円

動物園内での  
お食事、  
ご休憩は

動物園内.....  
**中央売店**  
TEL 06-771-0973



お食事・飲み物・おみやげ 動物園内  
**南園売店** TEL 06-771-7110



LOTTE .....  
みんな大好き

**コアラのマテ**

〈チョコレート〉      〈ストロベリー〉







雪印  
つぶより  
フルーツ  
ヨーグルト



●ライチミックス ●ストロベリー ●アップル ●ピーチ ●フルーツミックス

おいしさは、産地のよさです。

台湾のライチ、フィリピンのナタ・デ・ココとパイナップル  
国産の女峰、オレゴンのトーテム、中南米のチャンドラー、季節の旬を追って  
日本の富士、中国・韓国の国光。それぞれおいしい季節の  
桃といえば中国です。そして韓国。旬に一括収穫した白桃で  
アプリコット、メロン、アップル、パイナップル、ミカン。果物狂の

お待たせ  
新発売

希望小売価格・税抜 **各100円**



◎園内3ヶ所(南園高架下・北園中央デッキ北側・北園高架下)に各種のりものがあります。

**久竹娛樂株式会社**  
TEL(06)541-3938(代)



一日  
愉快地  
たのしめる

なきごえ 1997年2月10日発行(毎月10日発行)第33巻 第2号 (通巻378号)

編集 / 大阪市天王寺動物園事務所

発行人 / 大阪市天王寺動物園協会 伊東重朗

印刷所 / 株式会社 松村善進堂 定価150円(送料共) 1年継続(12部) 1,650円(送料共)

〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74

電話 大阪 (06) 771-0201

振替口座 00930-2-37823

編集委員 (樽本 勲/馬話好文/増野悦敏/中川哲男/吉本昌俊/長谷川敏昭/落合正彦/宮下 実/榎原安昭/森本委利/高橋雅之/市川久雄)  
中上正幸/堀 眞佐子/萩原祐二/竹田正人/高見一利/大野尊信/野口秀高/早川 篤/村上勇一/西村慶太/山元貞幸